

第2章

物語としてのキャリア

—森の語り場—

北村 真也



「森の語り場」は、今年度から始まった知誠館に通う若者たちのための語りの場です。具体的には、一人の若者が塾長である私のインタビューを受ける形で、これまで生きてきた軌跡をライフストーリーという形で語ってもらい、それを周りのみんなが受け止めていくといった形態をとっています。

この作業は、彼らが暗くネガティブなものとして捉えている自分の過去に意識を向けてそこに向き合い、それを自分のコトバでより生産的で意味のあるものへと言い換えていくことを目的としています。ただそのためには、彼ら自身の中に過去に向き合っていくだけの勇気と強さ、そしてそれを置換していけるだけの自分のコトバを持っていることがその前提となります。

知誠館では、昨年度から若者たちに個別のインタビューをおこない、その内容を別の機会に他の生徒たちにも伝えていました。すると、そのことを契機として彼ら自身がいくらかの影響を受け始め、その変容が促されていくという経験がいくつもありました。そしてこれを一つの変容のプログラム

として整備していったのが、この「森の語り場」なのです。

ここでは、3名の生徒たちのライフストーリーをエピソードとして紹介します。その内容は事実に基づいたものではあるのですが、登場する生徒名はすべて仮名とし、その状況も個人を特定されない程度の変更が加えられています。また実名で登場する人物は、すべて知誠館のスタッフです。

1. 生活保護と95%の敵

中学校の先生からの紹介で知誠館へとやってきた、中学2年になるマサトという男の子がいました。彼は入学早々「僕は高校にも行かないし、就職もしたくない。親が働いている間は親の給料で食わせてもらって、退職したら親の年金で、親が死んだら生活保護で生きていく」というようなことを平気で口にできる、一風変わった中学生でした。そんなマサトは、小学5年生から激しいいじめにあい、中学2年生の時に不登校になるのですが、中学時代はなんと学年の95%が自分の敵だったと言います。そ

んなマサトがどんな学校生活を送ってきたのか？そしてどんな家庭の中で育ってきたのか？彼のライフストーリーを、みんなで聞くことになりました。マサトの話は、小学生時代の自分がいじめられていた時のことから始まります。

塾長「知誠館に来る前の話を、マサトに聞きたいなと思うんだけど。」

マサト「ここに来る前のことですか？」

塾長「そうそう。その時は、中学校でいろいろいじめられたんだよね。あと小学校もマサトとしては全然楽しくなかったって言ってたね。」

マサト「小学校の1、2年の時とかは、あんまり記憶ないんですけどね」

塾長「1、2年の時は、まあまあ楽しかったんだ。」

マサト「まあ、そうだと思いますよ」

塾長「ということは、3、4年…」

マサト「そうですね。さらにひどくなったのは5年から」

塾長「そこから、すべての悪夢が始まっていくわけ？」

マサト「5年の時は、ほんま嫌でしたよ」

塾長「どんなことが嫌やったの？」

マサト「まずね、一言で言ったらいじめなんです。去年あの大津のいじめとかあったじゃないですか。あれなんかわかるっていうか。簡単に言ったら、あれと同じですよ。」

塾長「大津のどんなところがわかるの？」

マサト「全部わかりますよ」

塾長「例えば？」

マサト「例えば、自殺した子、中2でしたっけ？
気持ちはめっちゃわかりますよ」

塾長「いじめってどんな…？ クラス全体で…？」

マサト「もう全体ですよ。学年全体」

塾長「どんな風にいじめられたの？」

マサト「よく、男は肉体的な暴力を振るうって言うじゃないですか。女は陰湿って言うじゃないですか。精神的って言うんですかね。それ、ほんまその通りなんですよ」

マイ「殴られるの？」

マサト「殴られるし蹴られるしね。でも女の方が嫌でしたよ、正直。女は陰湿っていうのは聞くんですけど、そうだなあって今でも思うから」

塾長「悪口を言われるってこと？」

マサト「悪口とかね…悪口っていうレベルじゃないと思いますけどね。単なる誹謗中傷じゃないですか、あれは」

塾長「友達もいたんじゃない？」

マサト「いや、友達っていてもねえ。まあ人間たる者いくら仲が良かろうと保身にまわるじゃないですか。そういうことですよ」

塾長「ちょっと待って、あんまりよくわからない。小学校5年からいじめが始まるって、どういうことで、いじめって始まっていくの？」

マサト「そんなの知りませんよ」

塾長「何かきっかけのようなことはある？」

マサト「そんなの知りませんよ」

塾長「何もないの？」

マサト「ないんじゃないですか？いじめるやつは、いじめたいからいじめるんですよ。その事が結果的に他者を殺すことになっても、本人は知らないんですよ」

塾長「うーん？」

マサト「極端に言えばね、小学校とかやったら少年院もあるし、どうせ罰されへんのやからっていうのもあると思う。多分」

ミチオ「そんなの考えないやろ？」

マサト「いや、あるある。絶対ある」

ミチオ「小学校の時、少年法なんて」

マサト「いや、知つとるやろ」

ミチオ「知らんよ、普通」

マサト「いや、知つとる知つとる」

塾長「なるほど。そしたらその状態っていうのが5年の時にはあって、6年もそういう状態やったの？」

マサト「変わらない。クラスが変わっても一緒だったと思いますけどね」

塾長「学年全体から？」

マサト「そうですね。おれに言わせれば同学年の95%は敵やからね」

塾長「じゃあ5%の味方はいたわけ？」

マサト「味方ではないね。まだましなやつ、ってところじゃないですか」

塾長「先生は、どういう対処を？」

マサト「まあ先生も保身にまわるからね」

塾長「どういうこと？」

マサト「5、6年の時の担任の先生は、おれをいじめてたやつらからも嫌われてて、文句出たくらい女びいきやったんですよ。わりとおれがよく責められた記憶がありますね」

塾長「誰に？」

マサト「その担任に」

塾長「先生がマサトの事を責めてた？」

マサト「記憶の限りでは」

塾長「授業中なんかも、けっこう大変なことになってたわけ？クラスが崩壊してたとか」

マサト「そんなことはない。5、6年の時は普通に授業があった気がする」

塾長「そうか。そしたら5、6年は、いじめられたつらい経験しか思い出はないの？」

マサト「ないです」

塾長「小学校高学年の2年間は、結構つらかったんだね。」

マサト「つらいっていうか…もう思い返したくもないですよ」

塾長「…なるほど。その状態を引っ提げて中学校に行くことになる。中学校はメンバーも一緒だったの？」

マサト「まあ一緒です。中学校が大体2つの小学校から来るじゃないですか？なんだかんだね…、学校同士がそんなに離れてないし、近いわけなんです。だからどうせ違う小学校同士でも仲間みたいなやつがいて、おれの話は話題に上がってたと思うんです。それでまあ中学行ってもそのまま変わらず、みたいな感じでしたから…」

マサトへのいじめが激しくなったのは、小学5年生の時。ある特定の子どもからだけでなく、クラス全体からいじめにあっていたと言います。その上、仲の良かった友達や先生でさえ、保身のためマサトを責めていたと言います。このことがどこまで客観的な状況と一致するかどうかはわかりませんが、当時のマサト自身にそう感じられていたことは間違いのないでしょう。しかし、マサトの話の端々に彼自身が妄信的にそう思い込んでいるような気配も感じられます。彼は主にネットから様々な情報を手に入れているのですが、その情報そのものにも幾分偏りがある可能性が感じられました。ある意味で、ミチオの指摘は的を射たものであったのかもしれませんが。一人っ子で、なおかつ対人関係も極端に少なかったマサト。そのために偏った情報がいつまでたっても修正されていかない状況にあったのです。

マサト「小学校の時は、学校は基本的には休んでない。学校行かなくなるまでね、おれ、サボったこと1回もなかったんですよ。何の誇張

もなしに、休んだこと1回もなかったんですよ。病気の時は休みましたけど」

塾長「知誠館にも、そんな感じで休まず来てるもんなあ」

マサト「だからサボるってよくわからないんですね。当時は正直そうでした。でもね、中2の時におれサボったんですよ、1回。それまで1回もなかったのに」

塾長「中2の時に？」

マサト「中2のね、学校に行かなくなるちょっと前に、仮病使ってサボったんですよ」

塾長「ということは、中学2年のそのサボる時までは、サボったことなかった？」

マサト「ないですよ」

塾長「どんなにつらくても、学校へ行くわけや？」

マサト「ある意味それがモチベーションな感じですよね」

塾長「1回も休まないっていう？」

マサト「振り返るとそんな感じですよ。で、その時に1回サボったんですよ」

塾長「知誠館の何かの時も、「これ欠席になんの？」とかっていつも気にするものなあ」

マイ「へえ」

マサト「そう。一応おれ、ほぼ皆勤賞なはずなんですよ。でね、その中2の時に1回サボった…」

塾長「中2のいつごろ？」

マサト「あれはいつやろなあ…行かなくなったのは6月の中頃くらいか、5月の終わりくらいやったかな？5月の中旬くらいか」

塾長「何でサボったの？」

マサト「なんかね、嫌やった。嫌やったのはもちろんそうやったんですけど、何か切れたんですよ」

塾長「何に？」

マサト「切れたっていうのは怒ったんじゃないくて、

線が切れたって言えばいいんですか…」

塾長「ああ。ぷつっと」

マサト「そう。何か切れたと思うんですよ。で、1回サボったあとちょっと学校行って…。おれ、交通事故に遭ったんですよ。車にはねられたんです。チャリこいで、お互い不注意があったのかもしれないですけど…。今思うとその時に、おれはねられてもいいかなと思ってたんですよ」

塾長「ちょっと待って。その交通事故に遭ったのはいつ？」

マサト「中2の、サボった時の前やったか後やったか。正確には覚えてないけど、5月くらい」

塾長「その事と自分が学校をさぼった事と関係あるの？」

マサト「わからないけど、今思うとあったのかな？と思わないこともない」

塾長「どんなことで？」

マサト「今振り返ったら、生きるための生命線みたいなものが切れたから。今思ったらそういうのがあったと思う。あの時、車にぶつかって…もしかしたらそのまま死んでもよかったって思ってたんかも」

塾長「ふうん。ということはマサトにとってその時サボったっていうことは大きいわけや？」

マサト「多分その時に、自己防衛機能みたいなんが働いたと思うんですよ」

塾長「どういうこと？」

マサト「だから、自分で自己を守るみたいな。そういうのが頭にあると思うんです。そういうのが働いたのかなって。いろんな肉体的にも精神的にも限界に来てたのかなって。今はわりと冷静に振り返れるんですけど」

塾長「それでその交通事故の後、入院はしてないの？」

マサト「はねられたんですけど、全然けがもなか

って。すり傷とかはあったんですけど、立つて目的地に行こうとしてたくらいですから」

塾長「じゃあ、大したことはなかったんだ」

マサト「なかった。まあ大事を取って1日休んだくらいですね」

塾長「それから学校へ行かなくなるまで何かあったの？」

マサト「もう記憶ないですね」

塾長「学校へ行かなくなる決断というか、決心というのは、何だったの？」

マサト「覚えてないです。単純にそれが積み重なって限界が来たんじゃないですか？もう1回自己防衛機能が働いたと思いますよ。それが6月の半ばくらいだったかな。それから夏休みに入るじゃないですか。で、夏休み入るまではずっと家にいた気がするんですよ。夏休みの時は、とりあえず毎日朝から出かけて、どこかで昼飯食うか買ってきて帰って、っていう感じ。ストレスもたまってたからどこか行きたいじゃないですか。それで、どこか行って飯食って帰ってきたっていう記憶しかないです。夏休みの時は」

塾長「だからずーっと家にいたわけ？」

マサト「夏休みにはいるまでは、ずっと家にいた気がするんですよ。それから夏休み入って、その時は毎日出かけて。チャリこいでどこか行って、飯食うなり買うなりして帰ってた。その時に当然同級生とかに会うわけじゃないですか。だからひたすら裏道探したりしましたよ。あとは完全に迂回、回り道で」

塾長「それは、95%敵やったからな」

マサト「うん。実はその時、毎日おれカッター持ってたんです。だから殺したろうかなと思ってたんですよ。まあ自分が死のかなとか…。わりと不安定やったんですよ、本当に。それで、おぼんには「夏休み終わったら行けよ」

みたいに言われてたんですけど、行けるわけもなくね。これからどうするか、みたいなのを模索してて。まあ担任も家に来るじゃないですか。その時に担任がここを紹介して、そこから…。夏休み終わってすぐ知識館に来たみたいな感じやったんですけど…」

マイ「担任の先生は気付いてたの？いじめられること」

マサト「黙認でしょ。気付いてたかは…そんなの分からないけど。まあ仮に気付いてたとしても、何もしなかったと思うけどね」

マイ「マサト君のお母さんと話し合うとか、そういうのはなかったの？」

マサト「1回だけ最後の方は、おれが個人名出してこの人がやってるのや…みたいなこと言ってたけど、大して効果なかったからね。むしろは、しらばっくっていたし…」

塾長「その時の先生は、いい人のような感じがしたけど」

マサト「先生その人自身はいい人やと思うけど、いくらいい人でも、大したことできるわけじゃないということですよ。集団、組織対個人だったらそんなの勝てるわけじゃないじゃないですか。勝ち負けとか目に見えてるじゃないですか」

ここでは、マサトの少し強迫的な行動傾向が見てとれます。黒か白か、○か×か、その中間の立ち位置がとりにくいのです。中間、あいまいさ、それらは、マサトにとっては不安を呼び込んでしまう状況なのかもしれません。だから彼は、ある日突然その支えがポキッと折れるかのように、学校へ行かなくなるのです。「ぶつっと糸が切れたように…」と表現していますが、まさにその通りなのだろうと思います。マサトは

軽い事故をその契機として、自己防衛的に不登校になったと話しています。また中学校でも、やはり担任の先生に十分心を開いていないようでした。

しかし一方で、これまでのマサトの語りから、彼自身が自分がおかれた状況についてかなり綿密に、しかも論理的に考えていることがわかります。そういう意味では大変頭のいい子どもであることもわかります。ただマサトの思い描く世界は、あくまで彼自身の強いバイアスがかかったもので、周りの思いとはずいぶん隔たりがあることも推測されます。不登校やひきこもりの若者の場合は、他者との関係性が極端に低くなってしまっているので、その認知がかなり主観的で、周りとの間にズレが生じることはよくあるからです。しかし彼自身にとっては、その主観そのものが事実であることには違いないのですから、援助者はその前提の上に一旦は立ちながら、同時にそれを俯瞰的に見つめる視点もきちんと確保しておかないといけないのかもしれないかもしれません。

村岡「6月の中頃から正味7月の中頃まで、1ヶ月間学校休んだわけでしょ？」

マサト「そう、そのくらいですね」

村岡「それで夏休みになるやんか。そしたら長欠にしては短いよね」

マサト「まあそうですね。実際学校休んだのは1ヶ月くらいですね」

村岡「そういうことやね。それでここに来る判断ってというのは、すごい早いなあって」

マサト「だから…何やるね」

塾長「おばあさんや、それは」

マサト「ああ、それはちょっとと思うけど、正直お

ばんとかが、どこにおれを行かせるのかをずっと探してたんですけどね」

塾長「事細かに全部はちょっとしゃべれないんだけど、マサトの今のストーリーの中では、このおばあさんがとても重要なキーパーソンだったんです」

マサト「おばんがいなかったら、おれの家、成り立たへんし…まあ、良いも悪いもどっちの面もある」

塾長「おばあさんっていうのはお母さんのお母さん？今85歳とか？」

マサト「まあ80は、いってますね」

塾長「僕が初めてマサトに会った時は…おばあさんは、ここには来られなかったただけれども、お母さんだけが、最初来られて…。お母さんはどちらかっていうと、わりと心配性。不安をものすごく過度に抱くタイプの人で、あまりコミュニケーションとかも器用にできる人では…」

マサト「ない」

塾長「それで、お父さんはものすごく性格のいい人やったんだけど、どちらかっていうと、おばあさんが強力やった。おばあさんは彼の家のすぐ近所に住んでて、何かあったら出てきて、彼の家を仕切っていたりした」

マサト「まあそれも悪い面もあったかもしれんけど、おばんが仕切ってへんかったら、おばんがおらんかったら、おれんちはとっくに終わってた」

塾長「わかる、わかる」

塾長「それで、マサトのお母さんっていうのはどちらかっていうとおどおどするタイプなので、おばあさんに、これしなさい、あれしなさい、って言われて動くみたいな…」

マサト「実際そうしなかったらねえ。本当に…」

塾長「機能しないしな。マサトのお父さんは、さ

つき言ったようにものすごい人なんだけど、どっちかっていうと大人しい、控えめな人…」

マサト「まあ立場はな、弱いよな」

塾長「と、いう風な状況やった。それで、お母さんもここに面談で来られて、僕がいろいろ言ったら、言った事でものすごく不安になる。だからちょっと話しにくいなと思ってな。…さっき言っていた、学校でいろいろあった時に、普通は親が出て行ったりするけど、それがなかなかしにくかったっていう面もあったんじゃないかな」

マサト「でもおれね、親にはあんまり言わなかった気がするけどね」

塾長「そのあたりの少し難しい状況が、ひよっとしたら家の中にあったように思う。それで、ここに来るっていうのもおばあさんが決断して…」

マサト「違う、あのね、ここが先生から紹介されて、選択肢は他にも一応あったんです。その時に、選択肢のうちのおばんが勧めたんがここやったんですよ。行けとは言わなかったけれども、ここがいいと。推薦はしたんですよ。まあ実際、おばんおらんかったら多分来てない…。だからおばんにはめっちゃ感謝してる。うるさいと思う事もいっぱいあるんですけどね」

マイ「おばあちゃんと話す方が多い？」

マサト「今はないけど、昔とかそうでしたね」

塾長「前はけっこうそうやったな。おばあさんが前面に出たはったので…」

マサト「それはやむを得ないっていうか。そっちのいい面の方が絶対多かったですよ」

塾長「そうやな。そう思うわ」

マサト「そういえば、中2の時の事、言うんだったらまだまだあるんですけど…。学校行かな

くなったでしょ。それで、2学期行くじゃないですか。その時にたまたま友達と会ったんですよ。その子も不登校なんですけれど。その不登校の子が行く学校が、市内の左京区の方にあるんです。そこに通ってる子で、その子で遊んだりしたんですよ。それが、その時のおれの生活のモチベーションになってたかなと思いますね。その友達の家行ってしゃべったり。それがまあ、今思えばわりとその時の目的にはなってたかなと。一時期その子が行ってる学校に行くっていう選択肢もあったんやけど、おばんがそれは反対して。結果的には、ここでよかったと思ってますけど。僕はその友達に会ったことが、当時からすれば本当にでかかったなと」

ここでは、マサトの家族の話が出てきます。極度に不安を抱えたお母さんと、同居はしていないものの、そのお母さんの保護者として大きな存在感を未だに持ち続けているおばあさん。そこにあまり関わろうとしない大変おとなしい印象のお父さん。マサトはそんな歪な構造を持った家族の中で育ってきたことがわかります。ここで押さえておかななくてはいけないことは、マサトの行動に対する違和感が、この家族の歪さとリンクしているという事実です。マサトは、この家族との関係性の中で個人の人格を発達させてきたからです。

その中でもとりわけ、マサトにとっておばあさんという存在が大きかったようです。知誠館に入学するという決断も、このおばあさんの判断があつてのことだったようで、とにかくいろいろなことの決定にこのおばあさんは関わっています。そしてマサトは、

このおばあさんのことをうっとうしく思いながらも、一方で「おばんがいなかったら家族が機能しなかった」と振り返っています。このことからマサト自身は、家族のこともよく観察しており、その動きや関係性もよくとらえていることがわかります。大変頭のいい少年なのです。

塾長「その後、すぐここに来るようになったよね。初めて面接をして、すぐ体験みたいな感じで」

マサト「そうそう。だから別に…学校が嫌であっても、どっかに行くのが嫌っていうわけじゃなかった。他に行くところがあったら、普通に行くっていう思いはあったから。別に知誠館っていう選択肢があって、じゃあ行こうかな、みたいな感じでしたけど」

塾長「どんな印象だった、ここは？」

マサト「なんか前、ある人がフリースクール取材に来られたでしょ。その人の感想で、わりと高級カフェみたいな、そういう印象を受けたっていうのがありましたけど、多分その通りで。図書館って言うのもいいし、来た時に新鮮でめっちゃ素晴らしいなっていうのは思いましたね。そこから中2の半年間ここにきて、いやー、いいなあ、すごいなあってずっと思っていましたよ」

塾長「どういうところがいいの？」

マサト「まず環境とか…。いや、何て言うのか…でも最近も僕、絶賛してますよ。ここを絶賛しましたよ」

塾長「誰が？自分が？」

マサト「うん、自分自身もそうやし…当時の親しい友人とかには、この事言ってるんですけど、めっちゃ絶賛した記憶がありますね」

塾長「ふうん。まあ、やっぱり彼の場合は、家族

の構造の課題っていうのがあって。お母さんがそういう意味ではものすごく心配症だっということと、コミュニケーションがちよつとりづらいついていうことがあって…。マサトが自分の母親が普通のお母さんとは違っている風に認識するのは、小学校低学年くらい？」

マサト「それは、元々あったと思うよ」

塾長「いや、マサト自身の認識として」

マサト「昔からずっと。記憶を持ち始めてる時からあったと思う」

塾長「物心ついた時にはうちのおかんは、ちよつと違うなとかって？」

マサト「正直昔からあったよ。何だかんだいろいろあるから。だから少なくとも物心ついた時にはそういう意識はあったと思う」

塾長「なるほど。…こういう状況がマサトには元々あったんや。それで、小学校の5、6年くらいから、何で始まったのかはよう分からないけれどいじめが始まって。マサトから見れば、周りは敵だらけ。学校の先生は自分の事を守ってくれない、みたいな状況がある。それでも自分は休むのが嫌だから、やっぱりずっと行き続けなあかん、みたいなことやね？」

マサト「うん、そうやね」

塾長「まあそんな状況。少なくとも学校の先生から見たら全体の事実がどうかとかはちよつと違うかもわからんけど、マサトからすればそんな状況の中で小学校生活を送っていったということや。それでまあ中学校1、2年と行って、ある日突然ぷつと糸が切れたみたいで…」

マサト「今振り返ると、やっぱりそうなんだと思うんや」

塾長「彼なりに、今どういう風に考えてるかという、それが自己防衛本能やって言うわけな

んだ。つまり、そのままずっと生き続けたら自分の精神が破壊されるかもわからない、みたいな状況でふつと切れた、っていうのが彼の言ってることかな。それは不登校の子のお腹痛も同じような事かわからへん。自分の中でどこかメッセージを発しないといけない、でも上手く口でも言えないし、人との関係の中でも上手くやれない。体が一つメッセージを出したのかもわからないなど。それでまあここにやってきた」

マサト「その時のおれを知ってるのは、塾長とツヨシ君しかおらへんかな。今いる人では。その時からここでの出会いと別れというのを何回も何回も経験してきたんですけど、とても印象に残る。記憶に残る人がいっぱいいたね」

ここで私は、自分なりの方法でこれまでのマサトの話を振り返ります。私のコトバで彼の語りを語り直すという作業をおこなったのです。ここでの私の語りは、マサトというよりも、むしろ聴衆者に向けられています。聴衆者にわかりやすいように、語り直しを行っているのです。それは彼の語りと私の語りの重なりでもあり、相互的なやり取りの中から生じた共同の語りであると言えるかもしれません。また、その語りの矛先は聴衆者に向けられているので、マサト自身はこの私の語りを第三者的な立ち位置で聴くのです。この語りの取り込みが随分インパクトをもたらすようで、徐々にマサト自身の中にも何らかの変化が生じていきました。

塾長「僕がマサトの一番初期の頃に対して持っている印象っていうのは、一つは掃除の話かな」

マサト「あのね、ちょっとその話について言いたかったんですよ、正直。あれはね、僕まだ若かったですよ」

マイ「何、掃除の話って？」

マサト「あのね、僕掃除するじゃないですか。確かあの時、普通の部屋の掃除じゃなくて、外に出る掃除で、僕が、「金くれるんですか」みたいに言ったんですよ。思わずね。それが塾長からしたら「なんやこの子」みたいな感じで思われた」

塾長「違う違う。まず、マサトの最初の印象で、「掃除をどうしてしないといけないのや」という思いを持ってるなっていうのがあったの。マサトがよく言ってたのは、「授業料払ってるのにどうして掃除せなあかんの」とか。そういう発想」

マサト「まあ単純に疑問があったのかも分からないですけど」

塾長「いや、もっと言ったら、「マサト君、これお願いな」って言った事について、彼は大体「え〜、なんで〜？」みたいな。わりとそんな感じでいつも文句を言う」

マサト「ただね、そうは言っても中2の時はおれ素直でしたよ。中2の時は、そんなに悪意なかったですよ、そういう」

村岡「言うてしもたんやな。なんかこう…」

マサト「うん。ほんまに、さっきも言ってたけど、中2の時めっちゃ楽しかったんですよ。まあ今もいいですけど。その時は知らんことがいっぱいあったし、ここに来るたびに発見とかがあるじゃないですか。そんなことで中2の時、一番楽しかったっていうのがあります。あの時は勉強とかじゃなくて単純に毎日ここに来るのが楽しかったかなっていうのが、正直ありましたね」

塾長「では中3の話に。中3でなんでマサトが嫌

になったかっていうと、進路を決めないとい
けない話が出てくるから」

マサト「それで、僕、当然高校行きたくなかった
んですよ、普通の全日制なんて。あの時おば
んの意見もころころ変わって、最初通信制は
あかんって言われたんです。一時期、今の状
態みたいに、ここに来て通信に所属するって
いうことが決まったんですよ。そこから何ヶ
月かして、中3の11月やったと思うんです
けど、もう一回おばんがここあかんって言
たんですよ。それでもうごちゃごちゃあって、
進路のことで、中3の終わりの頃はボロボロ
やった記憶がありますね。あの時荒れてた記
憶ありますよ」

塾長「それ小牧先生、知ってますよね？」

小牧「そうやねえ、すごい…」

マサト「あのね、ここの夏休み入るくらいまでは、
わりと普通だった記憶がある。そこから夏休
み入るくらいから中3の最後にかけては、本
当に忘れたくらいに荒れてた。アホなこと
ばっかしてたなっていう記憶があるんです。
それは塾長がよく言う、夏休みに強烈に太っ
たっていうのもそうなんですけどね」

塾長「そう、激太りやった。びっくりした」

マイ「それは、ストレスで？」

塾長「多分ね」

知誠館での生活の中でマサト自身が最も
辛かった時期、それが中学3年生の後半の
時期だったのかもしれない。その理由は
進路決定。どうしても不安が先行する傾向
が強かったマサトにとって、何かを決定す
るということは、恐怖の感覚と対峙するこ
とでもあったのです。右と決めても不安に
なるし左と決めても不安になる。母親はも
っと不安になるので聞けないし、父親は頼

りがいがない。おばあさんは、こうしろと
強圧的に言ってくる。家の中が急に騒がし
くなっていったのもこの時期です。家族の
機能が歪だったため、その家族にストレス
がかかってしまうと途端に問題が生じてし
まうのです。そしてマサトは夏休みの間に
突然太り出していきます。よほど大きなス
トレスを抱えていたのでしょう。

塾長「それで、とりあえずさっきの話に戻るけれ
ど、中学2年の印象っていうのが掃除の事。
あと、高校に行かないっていうことは最初か
ら言っていて、生活保護で生きていくようなこ
とも言っていた。要するに、別に働かなくて
いい、親の年金で食べて、親が死んだら生活
保護だと。それから、もう一つは2チャンネ
ル。僕とかもよく分からないのやけれども、
コンピュータのネット上の情報をいっぱい
いろいろ知ってるわけ。それで、相手を論破
するっていうのがマサトのやり方だった…」

マサト「論破と言うよりも、相手がおれの事何か
言ったら別の話題に変えまくって行って、相
手の気を落とすみたいな感じやったと思う
んですけど」

塾長「それも、マサトの今まで生きてきた過程
の中で作られてきた方法というのか、そういう
ものやと思うのやけど。ただやっぱり気にな
ってたのが、全部自分中心なので、人の目線
でものを考えたり、人がどういう風に考えて
るかみたいなのがほとんど欠落してた。彼の
言う…確かに「周りほとんど敵やった」。
でもそれは彼、マサトから見たらそういう風
に見えるだけなのかもわからん。ほかの人
から見たらそうじゃないかもわからへん。で
も少なくとも、自分にしか視点がなければ、
それはみんな敵になるよなって思う」

マサト「あのね、今やったらある程度振り返れるんですけど、自分が周りを敵やと思ってたじゃないですか。自分が周りを敵やって認識するしか、自分の生きるモチベーションが保てなかったから、周りが敵やって思ってたのかなってというのはある。まあ実際敵やったら今でもずっと思ってるけど。だから自分のことを最優先にしなかったらとても生きれなかったっていうのはあったと思いますよ」

塾長「まあそうかも、わからん。そういう風な状況の中でそうなってたんやろうなと。だからここに来て、とりあえずそのあたりをどういう風にマサト自身が学んで、もう少し生きやすくなってここを巣立っていくのかっていうのがテーマになっていった。それをどういう風にしたらいいのかなって思いながら…。かつて、こんなこともあった。私が何か頼んだ。するとマサトが「えー」とかまた言うから、「えーって言うんやったら、もういいわ私がするわ」といつも言ってたんや。覚えてる？そしたらマサトは「やりますよ、やりますよ」とか言うわけ。それで掃除の時間に、小さな事件が起こる。あの休憩室のところで「床拭いて」ってお願いした時のことだけど、ふと見るとマサトが足で雑巾がけしているわけ。それで私ももう頭に来て、「はあ？」みたいな感じになって…」

マサト「塾長、その時怒りをあらわにしましたよ」

塾長「それは、でも、普通じゃないって」

マサト「でも雑巾で廊下拭くじゃないですか。周り見たら普通に足で雑巾踏んでやってましたよ」

村岡「しません、しません」

塾長「しないよな？」

マサト「だって変わらないじゃないですか」

塾長「今聞いてみたように、みんなはそういう風

に思わない。そこにマサトなりの筋書きはあるかもしれないけれど、それは普通の論理じゃないっていう事なんや。マサトは自分の論理を中心に考えるから、そうするのが当然みたいと思うけど、そうじゃない。それがズレなんや。あの時に何を伝えたかったかっていうと、それはマサトなりの筋書きだけど、ほとんどの人はそうじゃないっていうことを伝えないって思ったわけや。そこらあたりが、いろんなことがずれて、いろんなことでトラブルが起こったりする種なんかもわからへんなって思う場面が、一緒にやってるといろんなところで出てくる。そういうことをけっこうずっと言い続けてきたのかもしれないなって、思うんや」

知誠館でのマサトの行動は、いろいろなところで物議を呼びました。とにかくいつも自分の理屈で行動していくので、彼なりの常識と周りの常識とがいろいろなところで衝突するのです。そして衝突するたびに、彼は相手を言葉巧みに論破していきます。この手法は、きつとうまくコミュニケーションをとることが難しかった家族の中で、自分の言い分を通すために彼自身が身につけてきたものなのでしょう。そしてインターネットから得たたくさんの情報は、論破のための材料になっていたのかもしれない。

私はここでも、俯瞰的な視点に立ってマサトの行動のあり方についての解釈を聴衆者に向かって投げかけていきます。ある意味でこのことは、彼の恥ずかしい部分を見んなの前でさらけ出すことになるのかもしれませんが、そのことでさえ大きな意味が

あるのです。なぜなら、これがライフストーリーという枠組みの中である過去の事実として語られることによって、マサト自身も過去の自分を、現在の自分とは切り離された対象として見ることができるからです。過去はそうであっても、今は違う。むしろよくここまで変わったねと感ずることが、自尊感情を育てるのです。ましてやまわりの人間は、そんなところを持ったマサトを受け入れようとしていくのです。

その後通信制の高校課程へと進学していたマサトは、引き続き知識館に通い続けることになりました。新しい環境へ移行することに対して必要以上に緊張を覚えるマサトにとっては、それは最も安心できる結末であったのかもしれませんが。

小牧「あと2つ印象深いことがあって。一つはオープンキャンパスに「行けや行けや」って塾長から言われて…」

マサト「あ、正直に言いますよ、あれは行く気一切なかったです」

小牧「ただその時の理由の言い方が、なぜ自分はオープンキャンパスに行かないか。「校門一步入ったら誰かから殴りかかられるかも」…って」

マサト「そう思っていましたよ」

小牧「そういうことを行かない理由として…。まあ行きたくないにしてもマサト君の場合そういうことが行かない理由になってるんやなあ。だからすごい印象深い。いや、そんなこと起こるわけないやんって言ったら、いや起きるかもしれないって押し問答がずっとあった」

マサト「ありました、ありました」

塾長「今の話でも、それはお母さんのパターンと一緒になんだな。恐ろしく過度な不安っていうやつ。道を歩いてたら車がぶつかって来んじゃないかとか、考えていたら行動できなくなってくるという話と同じで…。結局、決まった行動パターンしか取れなくなってくるということになってしまう。これも本人を不自由にさせているので、何とかそれを解いてあげないといけないなって思ったのと…」

マイ「マサト君、ここに来る時は？」

マサト「それは、なんだかんだ自分自身、切羽詰まっていたから、その辺の思考も働かなかったかなって思う。ここに来る時は…」

マイ「学校に行かなくなっていていいんだったら、ここに来たいって…？」

マサト「それはいいかなって感じで、来てたと思うんですよ」

村岡「ここは安心して来たんや？」

マサト「そうですね。安心感っていうのは他のこと全然、学校とは段違いっていうかね」

小牧「もう一つ印象深かったのは、面談。面談でお父さんだけ来られた時に、「もう少しここでお父さんが、父親らしい行動をとらないとマサト君にはよくない」という話を塾長から随分一生懸命に話してもらって。そしたらその次の日から、マサト君の態度が違って見えたことかな…」

マサト「そんなことありました？」

小牧「やっぱり違った。おっ何か違う、みたいな」

マサト「その時も多分、おぼんとかと話があったと思うんですけど、その時に親父が強く出たんやと思う。話す時に。これまであんまりしゃべらなかつたんが、わりと言ってくるってことはあったかなと思う」

小牧「そうそう。「お父さんが前に出てもらわんと」、っていう話を塾長は言っていたから…」

マサト「それは確かにあったかもしれない」
塾長「お父さん、そう言ったはったんやね」
マサト「でも確かに当初に比べたら、親父も随分
こういうところに来るようになったなって
思いますね」
塾長「毎回来られてた。面談したらお父さんが理
解して、お母さんに対して説明してくれる。
でも、お母さんはその説明うけてもまだなん
かやっぱり不安なんだろうなって…」
マサト「一回親父が来ないで、おかんだけがここ
に来て、話聞くじゃないですか。おかんだけ
やったら、正直面談が終わらないんじゃない
かと思うくらいですよ。何回も何回も聞き直
さないと…」
塾長「ある時なんか、面談終わって家に帰ってか
ら 10 回くらい電話かけてこられたこともあ
ったなあ。「これはどうなんですか、これは
どうなんですか？」って…」
小牧「でもお父さんが一緒に来てくれるようにな
ると、お母さん「これどうなんやろう」って
聞かれても、「家帰ってお父さんに聞いても
らったらいいですよ。お父さんがちゃんと理
解してくれてますからね」って言えて…」
マサト「それは本当。中3の担任が家に来るじゃ
ないですか、その時にもおかんは何回も何回
も聞き直すんですよ。その時に、おれなり親
父なりと一緒に話聞いて、担任もおれや親父
が分かっていますから、まあまあ聞いてくださ
い、みたいな感じ。おかんしかいなかったら
本当に話終わらないくらい、おかんは聞き直
すっていう感じなんで。おれもわりと聞き直
す方なんですけど、おかんはおれよりはるか
に何回も聞き直すんや」

家族への介入、このことを私たちはとて
も意識的に行いました。彼の偏った認知を

作り出してきたのは、彼の育った家族との
関係なのではないかと考えていたからです。
そしてその家族への介入については、お父
さんがキーパーソンだと考えました。極端
に不安なお母さんを支えるためにおばあ
さんが表に出てしまうことはしかたのない
ことなので、そのおばあさんを抑えるの
ではなく、お父さんに表に出る勇気を持っ
てもらう。そうすることでお父さんとお母
さんという家族の中心的な機能を回復させ、
おばあさん自身も少しは安心させてあげる。
それが私たちの面談の大きな狙いでもあり
ました。

マサトの家族は、そういった意味では劇
的な変化を示してくれました。お父さんが
がんばったことで、しっかりと表に出てお
母さんをサポートする体制が急速に出来上
がっていったのです。マサトの家に、家族
という本来の機能が生まれていった瞬間で
もありました。その後面談の機会には、い
つもお父さんとお母さんが仲良くそろっ
て来られるようになりました。お二人はま
るでオシドリのように、いつもそろって私
たちの話に耳を傾けてくださるようになった
のです。

塾長「だから、お母さんと同じような傾向って
いうのは、基本的にはやっぱり持ってしまっ
てる部分がある。別にそれがいいとか悪いとか
じゃない。でも不自由な状態よりは、自由な
方がいいんじゃないかって思う。それをもっ
と自由にできたらいいのになって思うん
や。それで、オープンキャンパス。さっき少
し話が出たけれど、高校どうするっていうの
は、タエちゃんともこのあいだ少ししゃべっ

たし、ユキちゃんともタイチともこれからしゃべっていかないといけないんだけど…。マサトが中3の時もこんな話をやってきたんや。それで、マサトは中学の時は勉強はそこそこできた。だから普通に高校行ったらいいなって思ってた。それで、もう一人同じ学校から来てる女の子がいて、この子は〇〇高校の特進コースに行った。今もルンルンでやってみただけで、その子と比べると、マサトの方が勉強できた。その子は最初オール2とかの成績で、そんな状況だったけれどもちゃんと進学していった。だからマサトも「高校行ったら」って、ずいぶんいろいろと言ってたのだけれど、「うーん、やっぱり不安や…」とかなんとかって…。結局、〇〇高校のオープンキャンパスっていうのをセッティングした。マサトはそんなの全く行く気なかったとか言うのだけれど、多分それはあり得ない。私はいろいろ話しながら、進路のことを聞いてるはずなんや。マサトの意思もないのに無理やりのようなセッティングは絶対してない。だからマサトは、どこかで行ってみるっていう話をその時にしてたんだと思う。じゃないと、頼んだら失礼でしょ。向こうの先生に「マサト君をお願いします」って言ったのに。だから結局、あの時は…」

マサト「いや、あの時は仕方なく「行く」って言ったんだけど、本当は行く気はゼロでした」

塾長「まあいいわ。それで、中学3年の時は行けなかったんや。でもその後、この前大学のオープンキャンパスに行けた。あのころ行けなかったものが行けた、クリアできたな、っていうことで僕としてはとても喜んでる」

マサト「長い歳月でしたけどね」

塾長「まあそうやな。それで、今に戻ってしまう

けど、あのオープンキャンパスにマサトが行けたっていうことはものすごく大きかったみたい。中学の時に行けなかったものを、もう1回チャンスがあって自分で行けるようになった。しかも一人で行って僕がついていったわけでもないし。それで、その事がひとつの足がかりになって、京都府の職親というプログラムに参加していて、岡田さんっていう臨床心理士の人にフォローしてもらいながら、いろんな活動に参加している。そのことが将来的には、アルバイトっていうことにつながればいいなっていうイメージがあるんや」

マサト「まあ、まあ、まあ」

塾長「それで明日、その岡田君が来られるわけ。

2回目なんだけど。このあいだは、挨拶。今度は、具体的にどういう風にしていこうかという計画。でも、その前に彼がオープンキャンパスに行けたっていうことが、ものすごく大きい。これがまあ、大事な足がかりになって、知識館以外の世界、自分の知らない世界へとマサト自身が動けることができれば、またひとつ自由になれる気がするんだけどなあ—そんな思いがあるわけ。それでどうなの、ここに来てからもうずいぶん時間がたっているけれど、自分の変化っていうのか、自分は少しずつ変わってきたなって思う？」

マサト「あのね、それはずっとおるから、自分の考えとか変わっていったとは思わんですけど…。変わったとは思いますが」

塾長「どんなところが？」

マサト「まだまだ、あれですけど、本当に最初の頃に比べたら少しは自制がきくようになったかなって思います」

塾長「自制？自分をコントロールできるってこと？」

マサト「まあ、まだまだですけどね。いやでもね、
そういうところとかかな…。今でも思い出して
みると、中3の頃は本当に荒れた。中3の
頃は悪いところが出まくっていた記憶しか
ない」

塾長「あとまだここが、1年半くらいは十分ある。
なので、1年半の間にもっともっと変わって
いってこれればいいなと思うのやけれど。あ
の…、僕が今日の話で印象深かったのは、自
分以外の95%が敵、っていうイメージの中で
彼は生きてたんだって…」

マサト「まあ、それは今でも変わってませんけど
ね。今でも同級生は敵ですよ。ここは全然ち
がいますけどね」

塾長「だからその…、これからも知誠館以外の世
界を知って、その世界は95%以上敵ではない
と思う。そんな世界がどんどん増えていけば、
君の知ってる世界の中の嫌な部分っていう
のは、すごい少なくなるかもしれないなって
思う。だから世界を広げないといけないう
思うんや。あとは…、それは敵がない社会の
方がいいやんか。ここは敵のない社会だっ
て思えるわけでしょ？」

マサト「そうですね」

塾長「多分、ここでのマサトの振る舞い、行動、
言動は、すごく敵が多かった時のマサトの振
る舞い、行動、言動とは随分違うじゃないか
なって思う」

マサト「あの一、思うんですけど、学校へ行って
た頃は、自分で自分を押し殺してたって言え
ばいいんですかね。全く何も出さなかったん
ですよ。実際ここ来てから、趣味のこととか
言動とか、何をとってもそうなんですけど、
とりあえず出してるっていうか。自分を前面
に押し出してる。それがここに来る前は完全
に殺してみたいな感覚はあったから、本当

に。だから塾長がおっしゃるように、ここで
の行動とか言動とかと、当時のそれとは全然
違うっていうのは確かにそう思う」

その後、マサトはずいぶん安定し始め、
今度は自分の大学への進路を考えるために
オープンキャンパスへと足を運ぶようにな
っていきました。中学3年生の時には、い
くら言っても越えることのできなかったハ
ードルを2年後の今、彼は一人で越えるこ
とができたのです。そしてこのことをきっ
かけに、彼はボランティアや就労研修とい
った新しいグループにもどんどん関わって
いけるようになります。マサトの社会性が、
何かをきっかけにして堰を切るように開か
れていったのがわかります。彼が不安を自
分で越えはじめたのです。

何が彼をそんな風に変容させていったの
でしょうか？あるいは今まで支配していた
囚われから、何が彼自身を解放したのだ
でしょうか？その要因は、いくつもあつたよ
うに思います。知誠館という安心できる場所
の確保、自律的な学びの習得、家族機能の
回復、仲間との関係、自分の過去を対象化
させていく経験…、これらの活動が有機的
な関連をもって重ねられていく時、気がつ
けば、彼自身の変容につながっていったの
ではないでしょうか？

塾長「もうぼつぼつ時間切れかなと思うので、ち
よっと一言ずつ…」

小牧「はい。僕ねえ、マサト君に初めて会った時
の印象。機関銃のようにしゃべる子で、僕こ
の子の相手できるかなって一瞬不安になっ
た。でも、ほんま変わった。最初はね、周り

の人間が見えてないっていうのはすごくあったんやけど、周りの人間をよく見るようになったなど。それはすごく思います」

塾長「ヒロシ君どうですか」

ヒロシ「はあ、何でそんな小難しい言葉を使うのかなあと」

マサト「おれ使ってた？」

ヒロシ「使ってる」

マサト「例えば？」

ヒロシ「自己保身とか…」

マサト「そんな難しいって、普通違うんか？難しい？」

ヒロシ「いちいち漢字の言葉を…、悪口を誹謗中傷とかって言う一気に…」

マサト「そっちの方が表現として正しいかと思っ
てそう言うんだけど、そうか」

マイ「でもそう言ったらちょっと頭いいって思っ
てもらえるとか…。私なんか、誹謗中傷とか
言われても分からへんし…」

塾長「じゃあマイさん、どうぞ」

マイ「そうやねえ、私はまあ2ヶ月くらいですけ
ど、そんな落ちた時があったのかと。こんな
にしゃべるのに。ガーッと喋るじゃないです
か。むしろやられたら言い返しそやのに。
そういう一面もあったんやなど。ええ子なん
やね」

塾長「じゃあ、ヨシコちゃん」

ヨシコ「えっと…めっちゃ最初から話してた感じ
がしてて。だけど一緒の中学校やった子がいた
やんか。その子は、ここで初めてこんなし
ゃべるんやって気付かかったんやって」

塾長「そうや、学校では何もしゃべらへんって言
ってたよな」

マサト「だからその辺が自分を押し殺してた、ほ
んまそのままそういう…」

塾長「ごめん、それで？」

ヨシコ「そういう話聞いてて、考えられへんなー
と思って聞いてた」

マサト「あ、そうなの？」

ヨシコ「うん。めっちゃしゃべってるやん、ここ
で」

塾長「じゃあどうぞ。マサト君ってこういう人生
を送ってきやはったんや」

タカシ「えー…でも、なんでもかんでも全部おば
あちゃんが決めてたんやな」

マサト「あー、それはいい意味でも悪い意味でも
本当おばんがおらんかったら、おれの家はも
う空回りしてたっていうか。まあ他人から見
たらそうなるんやね。わりと古い家系ってい
うか。一番上が一番偉い、とか」

塾長「だから小牧先生が言ったように、お父さん
がキーになる人だっと思ってた。なの
で僕はあのお父さんに勝負をかけた。お
父さんがこの子を救えるかどうかだっ
て。だからあれはお父さんがすごい。あれは大きか
ったよね。はい、どうぞ」

サヨ「いろいろ大変なんやなああと、思いました」

塾長「サヨちゃんはいじめられたことは？」

サヨ「あのー…おばさんの先生に」

塾長「ああ、〇〇中学の先生」

マサト「ああ、あるで、そういうの」

マイ「先生がどういじめるの？ちょっと意地悪す
る感じ？」

サヨ「サヨだけ、宿題ぶわーって出したりとか…」

塾長「まあ、女子校なんでねえ。ちょっと独特の
世界があるのかも分からん。はい」

ユリ「あのー…自分も来てた時に全然知らなかつ
たんで、共通点とか、こういうことがあつ
たんだ、っていろいろを知れてよかったです」

タケシ「さっきマサト君の話にあつたように、や
っぱりおばあちゃんが大変だから…。感想つ
て、まあ、彼は変わったですよ。週4日いる

じゃないですか。それだと分かりにくいけど、この前学園のオープンキャンパス行けて、ああ行けたんやって。前はそういう無理やったと思うけど、行けたのは成長したんじゃないかと…」

塾長 「一応そういうような感じで。私はマサトにはつい最近しゃべったけど、けっこういじめてるん違うかっていうくらい、めちゃくちゃ言ってるときもあります。今まであれやこれやと。それで、私の望みっていうのか、それはやっぱり、もっと自由に生きてほしいなっていう事。だから自由に生きれるために何が必要なやろうかって。親子やからやっぱり似ているところはある。お母さんの持っているものを自身が受け継いできたというのか。そういう環境の中で小さいころから育ててくるわけだから、その影響ってものすごく大きいかもしれないなと思う。それで、お母さんには、おばあさんがいた。でもマサトが大人になる頃には、もうおばあさんは亡くなってる可能性が高いかもしれんな。だから、マサトには誰がつく？お母ちゃんは、おばあさんの代わりには絶対なれないからね。お父さんも多分なれない。だからマサトは一人で立たないといけない。その為に必要な事っていうのは、いろんな人と関係を作ったりとか、そういう中で上手くやっていったりとか、自分も上手く主張しなければいけない。そういう風なものをあと一年半の中で身につけて行ってもらえればなと思うんや。ここは居心地がいい場所やとは思っただけけど、ここにずっといれるわけではない。また私もいつまでもマサトにいてもらうのはよくないなと思うので、必ず巣立ってもらわないといけないと思うので、限られた時間の中でもっともっといろんなことを学んでくれて、もっと自

分が変わっていったらいいなと。だから嫌われるのを承知で、これからもいろいろまた言いますからね」

語り場の最後は、今日のセッションそのものを全員で振り返ります。若者たちがこれまで自分の辛い経験として封印してきた過去に向き合う場面を、彼の仲間たちがじっと見届けるのです。またこのセッションは、当事者が自分自身を振り返る機会であると同時に、参加者にとっても自分を振り返る機会になっています。そういった意味では、誰もが主体的に参加している場と言えるかもしれません。

「高校へは行かない、働く気もない、生活保護で生きていく」と言っていたマサト。その背景にあったのは、彼の偏った認知だったのかもしれない。その認知が95%の敵を作り出していたのかもしれないのです。しかし、その偏った認知は彼の育った家庭の構造と決して無縁なものではなく、その家庭環境に適応していくために必然的に身につけられたものかもしれません。しかし、そんな状況の中からマサトは変わり始めようとします。不安が先行するため、あらゆる提案に対しても一度は一定の抵抗を示すものの、変わろうとしていくのです。そこには、彼自身が日々の学びを通して積み上げてきた自信と、仲間たちとの絆があったのかもしれません。

マサトのエピソードが語りかけるもの。そのひとつは、不登校の問題の所在がいったいどこにあったのかということだったように思います。確かに彼の行動に対する違和感は、いとも簡単に「課題を抱えたマサ

ト」という像を作り出していきました。しかし、彼が育った背景の中には、課題を持った母親がいて、それをフォローするための独特な家族の構造と、独特な家族の機能があったわけです。マサトはそんな家族に適応する形で、自身の認知や行動パターンを作ってきたのかもしれないのです。つまり個人の課題は、それと切り離すことのできない社会との関係の中で考えるべき問題なのです。

ところが「心理主義」、あるいは「セラピー文化」が叫ばれつつある現代においては、どうしても個人の心理的な側面に焦点が当たる傾向にあります。個人の発達であったり、認知であったり、あるいは行動特性の中に問題の原因を見出そうとする傾向が強くなるのです。だからこそあえて、その個人を支える、あるいは影響を及ぼしている社会そのもののあり方を省察的に問う流れを作り出さないといけないように思うのです。

さらにマサトのエピソードでは、マサト自身の認知や行動の囚われということが問われていたように思います。強い不安から彼は同じパターンでしか行動できなくなっていました。その限られた行動のパターンに対して彼はいろいろな言い訳を用意するのですが、結局はそこから解放されません。すなわち同じ行動をとり続けざるを得ないということが、大変不自由な状態を作り出していたのです。

その不自由さからどう解放されていくのか。つまり、囚われの状態では行動の選択

肢はありませんが、その枠を外すことで行動そのものを選択できるようになるということ。これがマサトに対して、私たちが最も望んでいたことだったのかもしれませんが。しかしその枠を外すためには、いくつかのステップが必要となります。まずマサトがその枠の存在、あるいは囚われの状態にあることを理解すること。そしてその枠を超えたところに、より自由な世界があるということを知ってもらうこと。さらに、その枠を超える勇気を手に入れてもらうこと。

これらのステップを歩んでいくためには、必ずと言っていいほど、他者の視点が必要になります。自分とは違ったものの捉え方がないと、枠そのものが見えてこないからです。他者の視点は、自分を脅かすものではなく、自分のこれまでの枠を超えるために必要なものであるということ。それをマサトが受け入れるかどうか、大切な岐路でもあったのです。今回の森の語り場は、そんな岐路に立つマサトにとって、何らかの意味を作ったのかもしれませんが。

